「夜」

阿辻哲次（あつじてつじ）　京都大学教授

殷（いん）という王朝最後の王となった紂（ちゅう）は、古代ローマ帝国に君臨した皇帝ネロと並び称される暴君だが、その紂が行った悪行のひとつに「酒池肉林」がある。これは宮廷の庭にある池に酒をなみなみと充（み）たし、また木の枝に乾し肉をたくさん吊るして、裸体の美女をはべらせ、夜遅くまで明かりをともして盛大な宴会を開いたというものである。

こうして人民の苦労を忘れた王のために、殷はついに亡国の憂き目にあうのだが、ところでこの「酒池肉林」の話では、莫大な浪費もさることながら、夜遅くまで宴会を開き続けた点も罪悪のひとつに数えられている。

太古以来ごく近年に至るまで、人間は日没とともにその日の活動を休止し、翌朝までじっくりと休息をとってきた。「夜」の古い字形が《人》と《月》とからできているのはそのためである。人間が月を眺めながら横になって休息する時間が「夜」なのであって、そんな時間に酒を飲み、肉を食らうのは、昔は自然の摂理に背いた、とんでもない行為だった。

しかし燃料事情の改善と照明の進歩によって、人は夜にもさまざまな活動を行えるようになった。これが人間にとって進歩なのか、あるいは堕落なのか、夜が短いこの時期に考えてみるのも一興だろう。